

イネマソリンセス

黄金の祭壇

4



◆主な登場人物

国の命運を握るといふエヌマ神に供物をささげるため、それぞれの神が座する黄金の祭壇を目指し、側近とともに旅をするノズアイル城のクリームエール姫。

- ・姫(プリンセス) クリームエール・ショコラ 20 歳
- ・女戦士(レディウォリアー) マリーディ・エマン 22 歳
- ・魔道士(ウィザード) クオーラ・サリ 21 歳
- ・司祭(プリースト) ボワル・ケート 21 歳

クリームエール姫達はドナ神の神殿に捕われた。肛門治療室という如何わしい部屋で、熾烈を極める肛虐責めに喘いでいる。



◆各章

- ・ドナン液浣腸、強力下剤の酷責め
- ・聖水吸い出す女体樽
- ・巨大浣腸の恐怖
- ・レヴェリア悶絶瀕死
- ・ゴアとの共闘
- ・療養宿ママツ
- ・エネマスライムの巣窟①
- ・エネマスライムの巣窟②
- ・ミルルク神の神殿①
- ・ミルルク神の神殿②
- ・ミルルク神の神殿③

ドナン液浣腸、強力下剤の酷責め

肛虐調教が行なわれている「肛門治療室」

天井から垂れ下がる巨大なイルリガートル浣腸器。

ガラス容器の底からのびている鉛色の管は、ドナ神が両手に持つピストル型の嘴管に繋がっている。

「内臓がねじれるまで。ぐっひひ、たっぷりと薬液を撃ちこんでやろうな……！」

狙いを定めた先は、四つん這いで尻を並べている司祭ポワル・ケートとゴアの女神レヴァリア。

「ぐう……。何よ、その浣腸器は……」

「やめて浣腸なんて、もう！ ああ、嫌ぁ！」

やめてと何度言われようと、すっかり昂ぶっていて聞く耳持たない如何わしきエヌマ神。

ニンマリいやらしい笑みのドナ神が、ふたつ並んだ肛門にピストル嘴管の先をピタリとあて……

ズップッ！ スブリ！

「ぐあはッ！」「う、うおお～～ッ」

ズヌヌヌ……。ズヌ。

ズヌヌ、ズン。

直腸貫く銃口。長大な嘴管は太く、肛肉を巻き込みながら S 字結腸まで強引に深々と貫いてゆく。

ズブー——。

ズブズヌヌヌ。ズンム。

「はわわ……、ふ……深すぎる」

「あ……くッ……、どこまで挿入する気なの……！」

「痛、いたい、痛い！ 痛い〜」

「も……もうそこが限界よ！ やめてッ！」

肉壁の奥にあたり、S 字結腸までも伸びるようだ。これ以上挿入できないところまで来ると、ドナ神はすこしばかり引き抜いてあそびを持たせ、引き金に指を掛けた。

「——ひッ！」

「ううッ」

(注入がはじまってしまう!?)

「ぐっひひ。さあ撃つぞ、撃つぞお」

「あ……、あ、嫌！」

「ううう……」

不安げな声を聞くと身震いがする。

興奮から来る自らの軽い震えを確かめながら、ドナ神は引き金をひいた。

「そーれ、それ！浣腸だ！ズキュン」

ズツジュウウーッ

ズジュー—————！

「あむむむッ！あば、あづい、あ！」

「うむむ、くははぁ～～！」

天井から吊るされた巨大なイルリガートルに蓄えられたドナンの薬液。

これが勢い良く女肛深く、腸に発射されていった。

「ふあああッ」

「くう～、腸が灼けてしまう！」

女の悲鳴に興奮して、さらに引き金を深く引く。

「どうだ、ポワル。パキューーンン！」

ドクククク……！ ドッククク！

「うおおむッ」

「どうだ、どうだ！」

「あぐぁ、やめてえ！ お尻が灼ける！」

灼熱感のあるドナン液が注入されている間も、太い嘴管が前後に律動される。

そのたびに肉壁が外側へめくりだされ、また内側へめくりこまれる。

「ぐっひひひひ！ どうだレヴェリアは。ズドン！」

ズジューーーーーッッッ

「あ、ぎ……ぎついッ、あ、あぶッ、灼けるウッ！」

激流が腸にほとぼしりドクドクと大腸、小腸、胃袋までを押し上げる。熱したナメクジが何匹も腸を這ってゆく不快感。

ふたりの美女は火の息、氷の息のような嗚咽を吐き出す。

「きついのは当たり前だ。浣腸はきつい。そんなことを聞いているのではない！」

ドクククク、ズージューッ！

ドクンンン。

「あづ、あ、あ、もうウンチが出そうよ！」

「そうだ、便意だ。たまらない便意だろう！」

「たまらない、いえ、きいつだけよッ、ああッ、したい」

「どうだポワル！」

「〜〜ッ、き、きついわ！ きつい、きついいい。きつだけッ！」

「聞いていなかったのか！ ウンチしたいのかどうかだ！」

ズジューーーーーッ！

「したい、したいしたい！ したいに決まっているわ！ ウンチしたい！ ウンチしたいのーッ！ はあっ、はああ、こ、これでいいのでしょう。あ、あむむむッ！」

こう言えばいいのでしょうと、ドナ神を睨みつけ、半ばキレ気味になっているポワル。

そのような態度をとるポワルに、ドナ神はさらに強く引き金を引いて激流を与えていくのだ。

「ぐおほほほー——ッ！」

「あむむ、お……、お腹があづい、あああああ！」

髪をふりたくり煩悶するふたりの美女を見て、ドナ神は股間を激しく勃起。引き金を引く指にもジワリと汗が滲んだ。

ドククククッ！

ズージュ、ジュウー——ッ！

「ぐあは、あっぱ！ もう駄目、本当にウンチさせて」

「はあああ！ ぐあッ、はッ！」

灼熱の液が与える猛烈な便意は、背筋から寒いものを走らせ、裸体に脂汗を滲ませてゆく。

「まだまだ、はじめたばかりではないか！」

「きいいいッ、お、お腹が煮えるッ！ かはッ、さ、寒い」

浣腸を撃てば苦悶の声があがる。ドナ神は大喜びで薬液を次々に流し込んでいった。

「も、も、も、撃たないで！ ウンチがしたくてしたくてどうしようもないの！ いちどウンチさせて！」

「なんだと、ウンチを発射させてだと？」

「発射でも何でもいいわ、も、も、駄目なのッ！」

「あ……、あ……、あたしも！ ウ……ウンチを……！
し、したいッ！ あああ、出させて！」

「ウンチ発射させてと言え！」

「ウ、ウンチ発射させて！」

「お願い、ウンチ発射させてェェ！ したいのッ！ ウンチが
したいのーッ！」

ドナ神は返答せず。しばらく考え込んだ後「ウンチがしたくなるのは当たり前だ。やはり駄目だ。辛くてたまらんだろうが浣腸は始まったばかりだからだ！」

「は、はじまったばかりって、あうう、そんなッ！」

「ううむ、うむむむ……。こんなの、お……お尻が！ お腹ね
じれてしまう、あづいい〜〜ッ」

ドククククク。ズジュウウウ！

「ぐおお内臓が燃える、燃えるうう、うああ！」

「浣腸のすごさを思い知れ。ふたり仲良く腹でジックリ味わう
ことだ。それぞれ、浣腸ッ！ズキュンーッ」

ズジャー……ッ！ズージュ！

ドククククッ、ドククククッ！

「うおほうう、ああはあづい」

「ひゃッ、あ！ があ、むむむ、きつい、うむむ、ああは！
うああぐぐぐぐー——！」

「悲鳴はでかくなってきたが、お前たちの顔はまだまだ余裕そうにも見えるぞ」

「あくッ、よ、余裕なんてありません！」

「いや、まだまともに喋れているのではないか。その余裕があるうちは、口からは下剤を流し込んでやろう」

(う、嘘でしょう!?)

「ひいいッ、か、浣腸されて、下剤まで飲まされるの!?’

「う、うそ……。たた、ただでさえ」

「ただでさえ。なんだ」

「ただでさえッ、も、もうウンチしたいのに————ッ！」

ポワルは発狂したかのように髪の毛をふりたくって嫌嫌と暴れた。レヴァリアは覚悟を決めたように目を閉じている。

「くッ、こ……酷な責めだ、そんなことをされば腹がねじれてしまう！」

反応の異なる美女ふたりを尻目に、ドナ神は大きく息を吸い込んで「ようし、下剤を持ってこい……！」と叫んだ。

「お呼びでしょうか」「ドナ神さま。お呼びでしょうか」

すると、どこからともなく姿を現したドナ神殿の男性信者。

苦悶のふたりの前方からも、イルリガートルを置いた。

このイルリガートルの容器にもなみなみ、ドロリとした下剤が揺蕩っていておぞましい。

「うう……、ほん、本当にそんな惨いことをするのね！」

「ドナ神様は惨たらしい浣腸責めがお好きなのだ」

——パシィィィ！

「うっぐッ！」

鞭を持つ信者から強烈な一撃。

レヴァリアが痛みに体を痙攣させる。

そのこからは、信者たちが数人がかりで嫌がるふたりの口をこじ開けはじめた。

「あはあああ、いやあああッ！」

「こらッ、大人しく口を開けろ！」

「象もたまらず脱糞する強力下剤だ。ぐはははは！」

「あ、あぶ、あああッ！ いばあああ、アグ……」

「あがッ……」

ふたりは無理矢理に口を開かれ、下剤の流れる管を喉奥まで突っ込まれた。

ボワルは最後まで抵抗していたが、レヴァリアは観念して口を大きく開けていた。

コックが開かれ、下剤が直接胃袋に流れ込んでくる。

喉を通さずに下剤を直接体内へと流し込まれている。

「あ～～……、あくくッ、あはぁぁ」

「ようし、ピストル浣腸も再開だ。そうれズキュンン！」

ドクククク。ズジュルルーッ！

ピストルで撃ち出される激流。それは渦を巻いて腸を駆け上がり、胃袋を押し上げる。

「はあッ、あぶ、ぐるじい〜」

「ウップ、グハア、地獄の浣腸責めだわ」

押し上げられている胃袋にはドロリとした液状の強力下剤。

「あぶぶ！ウンチしたくて駄目、あああ！ 頭が」

（頭が朦朧としてきた……）

「こ、これをずっと飲まなくてはならないの！？ ううぐう」

ギュルルルル、ギュゴゴ、ギュキュルルル、ギュウウウ。

「かははあッ！」

象もたまらず脱糞する下剤の効果は異常。

大腸も、小腸もふいごのように喘ぐ腹部から目にみえるくらい蠕動している様子が窺える。

たまらず漏らそうと裏返りそうになる肛門だが、びっちり直腸に食い込まされているピストルの筒。

それが逆流防止の弁となっており、強力なアヌスストッパーの役割を担っている。漏らすこともできない。

ギュルルルル、ギュルゥ！

「ん————ッ！ ん————ッ！ ん————ッ！」

上と下から膨れ上がる凄まじい便意は、腸が丸ごと飛び出してしまいそうな錯覚に陥らせる。

ギュルルル〜。

ギュル、ギュルルルル、ギュルゥ！

「あぶ、ほん、本当に地獄。死ぬッ！ ぐるじ、ぐるじ、ぐるじ
じいじい、あ————ッ！ あ！ あ！」

ポワル、レヴァリアの肛門が大きく開いた。

——だが、漏らせなかった。

(ぐるじ、ああ！ ぐるじいじい————！)

「も、やべてえ！ も、か、浣腸嫌あああ！ お願い何でも
するから、浣腸器をはなして！ い、い、いちどウンチをだ、
ださせてッ！ ぐださひい、あとでまたされますからああ！」

たまらずポワルが逃げ出そうと上体をもたげるが……。

——ビシィィッ！ ビシィィ！

「痛い！ ぐあ、あ——ッッ」

——それも駄目。

「貴様、またドナ神様から逃げようとしたな！」

責められる美女の両脇を固めるのは、先ほど呼び出されたド
ナ神殿の男性信者。ふたりがあまりの苦しさに逃げようと上体
を起こす。すると、すかさず強烈な活力の鞭が背中に弾けるの
だ。

「うぐ、ポワル逃げようとするな……。あ……。あたしにまで鞭
が飛ぶ。ぐむ……。辛いのはわかるが諦めてじっと耐えるんだ。
うぶぶ……」

「レヴァリア神！ お前も黙ってドナ神様からの浣腸を受けな
いか！」

——ピシィィ

「ぐはぁッ、くうう～～ッッ。に……人間の分際で」

「なんだと！？」

ピシィィ、ピシッ！

「がは！ ウブブ、口から出る！ うげええ——」

ピシャピシャピシャ。

「下剤を戻すな。ぜんぶ腸に納めなければ意味がない」

「そんなに苦しいかレヴァリア。口から漏らす程か！」

「ぐぐ、ぐるじいい、ぐ、げええ～！」

いちど吐き出した嗚咽はとまらない。

背中を大きく痙攣させるレヴァリア。

胃液で黄色くなった下剤が吐き出され続ける。

「う……うっぶ」「おっと、もう口から漏らすな！」

——ピシィィィィ！！

鞭で背中を叩かれると、脂汗も飛ぶ。背中中の振動が内臓に伝わりよけいに便意が膨れ上がる。

ギェルルルル、ギェルウ！ ギェルルル、ギェウウウ！

「かはぁぁぁ——……！」

「ぐああお願い、ウンチしたくて、ウンチしたくて、もう頭がおかしくなりそうなのォォ！ ドナ神！ ドナ神様ああッッ」

遂にボワルは発狂寸前。全身を揺すり、脂汗を飛び散らせながらも必至に頭を振りたくって懇願。

「なんでもするからウンチさせでえー……ッ」

既に焦点の合わなくなった目。震えの止まらない全身。滝のように流れる脂汗が、その便意を如実に伝えている。

「ぬはは、随分と余裕がなくなっている表情だ。我慢して我慢して、我慢して、我慢するのが浣腸だ。苦しいのは伝わる。たがボウル、ひたすら我慢するのだ！ おい、鞭をいれろ」

ーピシィィ！ ピシ！

「いっぁッ！ お願い、お願い、お願い！ なんでもする！ 私、なんでもしますからぁぁ〜〜ッ」

女がどんなに苦しんでも排便を許さぬ容赦のないドナ神。尻が、肛門が猛烈な便意にうねり、悲鳴をあげていて、吐き出そうと蠕動する直腸の様子まで全てドナ神の手に伝わってくる。

「ぐへへへ。なかなかいいぞ。まだまだまだ我慢しなさい」

この感触をいつまでも味わっていたいドナ神なのだ。

「レヴァリアはどうだ！」

「我慢しているわ……！ うぐッ、させられているじゃない」

「ぐっひひひ。そうだな。いい肛門の手ごたえだ。浣腸ピストルから伝わってくるぞ。このたまらん手応え！ 苦しめ、苦しめ、我慢、我慢、我慢、我慢しろ」

「ああ、こんな地獄よ。べ……便意の地獄だわ。灼きつく、うう、灼かれる地獄の浣腸責めよ、ん、ううむ。んッ！」

「ポワル、漏れそうか!？」

「さ、さっきから言っているじゃない、もももう漏れる!もう漏れる! もう漏れるの——! あゝ——っ!!」

ギュルルル、ギュルル。ギュルルギュウウ。ギュゴゴ。

「あがが、漏らせないゝ——! アウアウアウ……」

「うわはは!」

ギュルル。ギュルルギュウウ————ッ!

「うッッおゝ——————ッ!」

便意の発作はもう止まらない。

頭をふりたくり、汗を飛び散らせるポワル。

じっと耐えていたが、遂には奇声をあげて白目を剥きだすレヴェリア。

「美女が浣腸の便意に悶える姿こそ至高の光景。興奮して喉が渴いてくる程だ」と、ドナ神は興奮で幽鬼のような表情。

「……ドナ神様、喉が渴かれたのであれば水をお持ちいたしましょう」

「よい、水などより数段いいものが目の前にあるだろう」

「……?」「……?」

「おい……」

「……ん、なんだ」

(おい、ドナ神様は女体樽の事を言われているのでは?)

(はッ、そうか……) (それか……)

「ドナ神様。……いいものとは、女体樽のことでしょうか」

「そうだ。そこにあるカテーテルを使い、女体樽より聖水を搾り出そうではないか！ うわははは！」

聞いたこともない造語が飛び交うが、便意に喘ぐふたりにはぼやけて聞こえている。臨界を超えた便意に気を失いそうなほど切羽詰まっている。ドナ神は興奮し、嘴管を抜き差し。

「すぐに取り掛かります！」

「お前も鞭を振るって喉が渴いているだろう」

「はッ！ はい。……あ、あの、私どもにも頂けるのですね」

「女体樽が、頂けるのですか！？」

「わはは！ 当然よ」

ドナ神は男性信者に飲め飲めと、コップを持つジェスチャーを送った。

「おお……！」

「う、う、うおお、ありがたき幸せ！」

「女体樽だ！ おおお！」

踊るような男性信者たち。

ここで初めて「女体樽」とはっきり聞こえた。

聖水吸い出す女体樽

「ううぐ……あぶ、これ以上何を……！」

女体樽という聞き慣れない言葉にポワルは悪寒を走らせる。同じく便意に耐えながら顔を伏せているレヴァリアは青ざめているが、何をされるか分かっている様子。

「嫌あああ！ こわい！ なな何をするのよおお！」

「女体樽……。はぐ、挿入される時、少し痛いだけさね……」
(によたい……だる……？ そう、にゅう……、どこに挿入されるの……！ もう性器しかあいていない……！)

「すぐにわからせてやる。股間を突き出せ！」

「え……！？ あ……！」

浣腸を受けている肛門の下。女の部分である大陰唇が左右に押し広げられた。

「痛ッ！ う、そこは」

(ああ、やはり性器を……！)

「オマ○コを広げられるのも久しぶりであろう」

「ま、まさか……セックスするつもり！？ やめて！ お腹が痛くてそんなのできないわ！ ぐるじいの——ッ！」

「セックスなんかより屈辱的なやつさ……。なァレヴァリア」
(……………ッッ)

信者が持ってきたのはガラス製のピーカーとカテーテル。

目にもたまらない開ききった女性自身。ヌラヌラとひかるそこにライトをあて、何かを探しているようだ。

(何をしているの！？ 何をしているの！？)

「ようし、穴を見つけたら同時にゆけ」

「ひひ、ポワル・ケートの穴を見つけました」

「……こっちもありました！」

「ようし、ゆけい！」

ツブリッ、ツブゥ！

ツブゥー！

「ふあッ！？」「くッ……ふッ！」

痛みと不快感が同時に訪れ、脂汗まみれの美女ふたりがのけ反った。ジェルのまわり付いたカテーテルが尿道をスルスルと侵入してきたのだ。

「あーーーーッ、いたッ、あああ……」

カテーテルは女の肉をかき分け、膀胱まで届いた。

チョロ…、チョロロ。

「おお……！」

ガラス製のコップに黄色い尿が落ちると、男たちから感嘆の声があがる。



(……！？ なにをされているのよぉ！)

ポワルは後ろを見ようとして、上体を起こすが。

ピシィー……ッ！ と強烈な鞭が飛ぶ。

「いだッ、いだいーッ！ きいい！」

強制的に排尿されていることを知るのは男たちとレヴァリアだけだった。

「……う。うう……、なんてひどいスカトロ責めだよ」

「これがエヌマの責めよ。聖水は勝手にでてきておる。お前らは気合い入れて肛門開き、自ら進んで浣腸呑むようせんか！」

ドクククク……！

「うお~~~~……ッ！」

(死ぬ……ッ)

この先は本編でお愉しみください。